

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 93 回 黄金週間はこれだ！ 少し前の名画『シービスケット』

評論家みたいにウンチク述べるつもりはないし、そんな能力もないのだが、今回は映画の話をしてみたい。

2003 年のアメリカ映画『シービスケット』である。ゲイリー・ロス監督、トビー・マグワイヤ、ジェフ・ブリッジス、クリス・クーパー等が出演した、少し前に話題になった映画である。せっかくだから、ちょっと、あらずじを...

時代は 1929 年の大恐慌以降のアメリカ、かつてない不況に苦難の季節を迎えていた。自動車販売で成功したものの、息子を事故で亡くし、妻にも去られた大富豪ハワード（ジェフ・ブリッジス） 開拓時代の終焉により、時代遅れのカウボーイとなった調教師トム・スミス（クリス・クーパー）と、一家離散の憂き目に合い、草競馬のジョッキーに身をやつした天才青年騎手レッド（トビー・マグワイヤ） 人生の辛酸をなめた 3 人が、運命の糸に導かれるように、一頭のサラブレッドに出会う。「シービスケット」という名の馬も、彼らと同じく運に見放された小柄な馬だった...。同名の原作は、アメリカで 430 万部以上の大ベストセラー・ノンフィクション小説、つまり、「実話」である。

これは小生、久々の「お勧め」である。

最近の映画の傾向とは少し違う、観終わった印象は「静かで、淡々とした」という言葉がぴったり。キャラクターの微妙な心情などは説明されることなく、それぞれのエピソードと映画の流れとの解説もなく、あるいは眠くなる人もいるだろう。「なぜ」「どうして」と思われる場面が多々あるかもしれない。音楽も、実に「冷静」でしかもロマンチック。最近の、派手な演出、映像、音響に慣れきっている人、淡々とした映画を見慣れていない人には、すごく分かりにくい、あるいは物足りないと感じるかもしれない。

でも、いちいち何でも「説明」されるより、自分なりの想像力を掻き立てられ、自分勝手により感動が膨らんでいく楽しさは、久しぶりの面白さだった。大音響の中、急テンポで、シーンが目まぐるしく変わる映画は、とてつもない「疲労感」を感じてしまう。

登場する人達も、挫折を味わい、どん底から這い上がってきたキャラクターで、人情味と優しさに満ち満ちている。レースシーンの圧倒的な美しさは、古きよき時代へのノスタルジイを誘い、スピリチュアルな感慨をもたらす。ただ単なる、アメリカン・ドリーム物語になっていない、深い感動をもたらす名作にふさわしい好編と言っても過言ではない。

もうじき、今年も、やたら長いゴールデンウィークがやってくる。少しお暇のある方は、DVDでも買ってきて、実際に観賞していただくこと、是非、お勧めする。